

心身障害児父母の会 「ひまわりの会」

どの子どもたちも 生命の尊さは 一緒です。

山鹿市西上町の山鹿市肢体不自由児母子通園センターに、毎週土曜日の午後、障害を持った子供達が母親に連れられて集まって来ます。心身障害児父母の会「ひまわり会」のメンバーです。

八畳程の小さな部屋には、学校の体育の時間に使うような分厚いマットが一面に敷きつめられ、動作訓練ができるようになっています。この日は7名の子供達がボランティアの先生の指導で訓練を行っていました。会長の小崎明子さんの長女あゆみちゃん(12歳)もその1人。あゆみちゃんは脳性小児まひのため歩くことができません。

「どうしてこの子だけが」 そう思ったこともありました。でも、この子のおかげで生きることのつらさ、大切さを知ったような気がします。大変なことだけど、とにかく前を向いて生きていかなくちゃ子供に申し訳ないですから。親が強くならなくては、そして私達が社会に対して働きかけをしていかなきゃどうにもならないんです。現在30名のメンバーがいますが、みんな強いですよ。」あゆみちゃんを膝に乗せて小崎さんは語ります。

「ひまわりの会」では、昨年12月、「おもちゃ図書館」をオープンしました。楽しく遊びながら訓練ができたら、そして、おもちゃを通じて一般の子供達やそのお母さん達との交流ができれば—そんな思いでこれまでやってきましたが、後の方についてはまだまだ壁が厚いようです。それでも、少しずつでも地域の人達にわかってもらいたいと力を含ませて頑張っているそうです。

「可能性を捨ててしまっは終りです。世の中というのは、いろんな人で出来あがるジグソーパズルみたいなもんじゃないから。そしてこの子たちも、なくてはならない大切な一片なんです。障害児も健常児も生命の重さは一緒ですもの—」

小崎さんの言葉をかみしめながらバスに乗ると目の前にシルバーシートがありました。見つめているうちに、「電車やバスの中からシルバーシートがなくなった時。その時が本当の福祉社会といえるんじゃないかな」そんな思いが浮かびました。



ファミコンも 面白いけど 人形劇の楽しさも 教えてあげたい。

熊本大学 人形劇サークル 「青い鳥」

熊本大学に「青い鳥」という人形劇サークルがあります。発足は昭和40年。春・秋の市内公演・夏休みを利用した巡回公演。そして年末の定期公演と20年以上も子供達に夢を送り続けています。

公演準備で忙しい皆さんを、熊大キャンパスに尋ねました。

会長の福岡哲朗君(工学部3年生)に案内され、学生会館の階段を昇りかけると、上からすごい発声練習の声。演劇部の練習かなと思っていたら、これが「青い鳥」のメンバー。そのいでたちはと見れば、そのうえ屈伸運動が始まった時は、しばしポーズ。こりゃ一体、何なのだ、たしか、人形劇をやってるサークルのはずなんだけど……しかし、この疑問も、人形を使ってる練習が始まったとたん吹っ飛んでしまいました。1メートル程の高さにバーを渡した仮の舞台の向こうで人形を操る様はまるで体操。のけぞったり、屈んだり、体を低く沈めた状態で人形を使い、マイクも通さず、セリフを言う姿に「人形劇」に対して抱いていたイメージは一度に消えてしまいました。いつでも舞台の人形達は、そんなこと関係ないように、楽しげに動き、しゃべり愉快なお話を繰り広げます。

「ボランティアなんて大それた意識はありません。僕がこのサークルに入った動機も、「子供達と遊びたい」と思ったからだし、他のメンバーも奉仕なんて思っていないんじゃないかな。人形劇だけでなく、紙芝居やゲーム、キャンプファイヤーなど活動も様々。やっていて僕ら自身楽しいし、何より子供達が喜んでくれるのが一番嬉しい。「ファミコンも面白いと思うけど、こんな遊びもあるんだよ。」て教えてあげたくて—。えっ今後のサークルとしての抱負?このままでいいんじゃないかな、ずっと続けていけたらそれでいいと思う。」



優しい瞳の福岡君はそう語ると、練習の輪の中へ戻って行きました。

今年の定期公演は12月20日に川尻町の南部市民センターで行われる予定。もちろん入場は無料だそうです。乞う御期待!!

